

大阪府池田市で11人きょうだいの末っ子として生まれた。物心ついたころには太平洋戦争のただ中で、国民学校（現在の小学校）5年で終戦を迎えた。

幼少から中学までは私にとって空白の時代でした。いつ空襲されるかわからず、学校の授業はほとんどありませんでした。大人も子どもも頭の中は食べることで、戦火から逃れることだけ。校庭を耕して芋や小麦を植



えていました。戦争直後の旧制中学には英語の教員もいませんでした。日本社会から教育が抜け落ちていました。

明治生まれの父は金網職人で、自宅で針金を編んでコメのふるい器や餅を焼く網を作りました。私もたまに手伝いをして、農家との物々交換で何とか食いつなぎました。誰もが食うに困った時代です。父は俳句や俳画をたしなむ趣味人ではありませんが「商売人のせがれに学問は

② 遺児の心にかける虹

あしなが育英会会長 玉井 義臣さん

必要ない」と、子どもには義務教育しか認めませんでした。

1950年に府立池田高校に入り、滋賀大学経済学部に進学。卒業後は大工や日雇いの労働、証券会社の飛び込み営業など職を転々とした。中卒などの兄や姉は社会で苦労し、「末っ子だけは大学に行

灰色だった20代 母の事故死で奮起

かせよう」と学費を工面して応援してくれました。高校に入ってから生まれて初めてまともに勉強をしました。がむしゃらに旧帝大を目指しましたが、合格は腕試しで受けた滋賀大のみ。スポンサーである兄に「学費の安い国立大へ現役で行け」と言われて、逆らえませんでした。

傷ついた自尊心を抱え、大学の講義にも出ずに自堕落に遊びほうけました。

「君ほど出来の悪い者はいない」と教授に言われながら5年かけて卒業したものの、就職先などありません。母や姉に小遣いをもらってぶらぶらする日々。上京して証券会社の飛び込み営業もしましたが、成績が悪く1年ほどでクビになりました。

人生を変えようと「経済評論家になる」と宣言し、本を数冊出版しましたが売れず、心が荒廃していききました。明日の暮らしが不安だと、人はこれほど切迫するのかと実感した灰色の日々でした。

「ハハコウツウジコ キトク」。東京で貧乏暮らしをしていた28歳の年末、電報が届く。

震えながら大阪の病院に駆けつけました。1年ぶりに会う母はひどいけがをして意識を失っていました。夕暮れ時に自宅前の国道の交差点を横断していた母に、スピード違反で脇見運転のトラックがぶつかったのです。6歳もはね飛ばされたと聞きました。

見舞いに来た叔母の言葉が胸に突き刺さりました。母は親元を離れて好き勝手に暮らす末っ子の私を心配し、「義臣に嫁はんもろたるまで絶対死なれへん」と言っていたというのです。親不孝な自分を責めました。健康で温和だった母はうめき声を上げて苦しみながら、目を覚まさないまま1カ月後に亡くなりました。大きな怒りが雲のように広がりました。「おふくろは殺された。敵をとったる」。人生が百八十度転換しました。



学ラン姿で大学に通っていた（手前左が玉井さん）